

北部地域における密植桑園の桑収穫技術

(蚕試：一戸分場)

1、背景とねらい

寒冷な県北部地域に適した多収型桑栽培技術と並行して、機械収穫を前提とした全伐型式の桑収穫法を早急に確立する必要があり、生産技術体系の設計指標（平成2年2月岩手県農政部）として養蚕主業型「県北 500アール」の体系を示した。

しかし、当地域はヤマセ等の気象条件下にあり、年次別収量差が大きいことから、現地実証試験を中心に、同収穫法の桑収量と桑品種の特性を生かした利用方法等について検討した。

2、技術の内容

1) 収穫型式と桑品種の利用

- (1) 収穫型式別適応桑品種は、一春・一夏輪収法および株上・株下輪収法には、耐寒・耐病性の優る「ゆきしのぎ」が適し、夏秋専用桑園は多収性の「あおばねずみ」と「しんけんもち」が適する。
- (2) 春切枝条を初秋蚕期と晩秋蚕期に基部80cm残して収穫する場合、2畦ごとの隔畦収穫が枝条下部の落葉抑制に有効である。
- (3) 機械収穫は人力収穫（剪定ばさみ）に比べ、春蚕収穫枝条の先枯れがやや多くなる傾向がみられるが、採桑労力、省力化の観点から機械収穫を優先するものとする。

2) 桑収穫量と蚕期別割合

- (1) 年6回飼育に対応した収穫法では、過去4年間の平均収葉量は10a当たり約2,000kgの葉量となった。
- (2) 平均収量から試算すると、蚕期別割合は第2春蚕が11%と少ないが、他の蚕期は17~19%で、均等飼育が可能である。

3、指導上の留意事項

- 1) 晩秋蚕期と晩々秋蚕期の収穫は伐採後の枝条に緑葉が不足すると桑枝軟腐病が発生する危険性があり、落葉状況により刈高を上げて（緑葉5~6枚残し）収穫する。
また、品種の性状によっても異なるが生育・伸長の勝る「あおばねずみ」と「しんけんもち」の収穫は、特に注意が必要である。
- 2) 各蚕期の収量に過不足が生ずる場合には、収穫圃場の面積比率を補正して収穫する。

4、参考文献・資料

- 1) 岩手県農政部（平成2年2月）：生産技術体系－農業経営の設計指標－354~359
- 2) 及川英雄・鈴木繁実・八重樫誠次(1988)：蚕試報告(10)82~85
- 3) 宍戸貢・鈴木繁実・小澤龍生(1991)：岩手蚕試要報(14)43~54
- 4) 土佐明夫・阿部末男・伊藤眞二（平成3年12月）：東北蚕系研究報告(16)57~58

5、試験成績の概要

表1 北部地域における密植全伐条桑収穫法及び収葉量

型式	蚕期 掃立	蚕期						翌年 収穫 型式	収 穫 量		
		1 春蚕期 (6/1)	2 第2春蚕期 (6/20)	3 夏蚕期 (7/10)	4 初秋蚕期 (7/29)	5 晩秋蚕期 (8/17)	6 晩々秋蚕期 (9/5)				
一春一夏 輪収 株上 株下 輪収 夏秋 専用	夏切 100a	A	基部伐採 収穫 19,380kg					基部30cm 残収穫 7,160kg	B	26,540kg	
	春切 100a	B				80cm残隔畦 収穫(50a) 4,980kg		80cm残隔畦 収穫(50a) 6,290kg	A	11,270kg	
	株上 春切 100a	C		新梢基部 伐採収穫 12,710kg				再発枝10cm残 収穫(50a) 5,415kg	再発枝10cm残 収穫(50a) 5,770kg	D	23,895kg
	株下 春切 100a	D			基部50cm残伐 採収穫(40a) 4,036kg	基部50cm残伐 採収穫(60a) 8,928kg			再発枝10cm残 収穫(40a) 2,624kg	C	15,588kg
	春切 100a	E			基部30cm残 収穫 11,860kg			再発枝10cm残 収穫 8,820kg	E	20,680kg	
500a	収葉量		19,380kg	12,710	15,896	13,908	18,865	17,214		97,973	
飼育計画	掃立量		29.0箱	19.0	30.5	30.0	32.5	29.5		170.5	
	収 穫 量		1,015kg	665	1,068	960	1,105	1,033		5,845	
	蚕期別割合		17%	11	18	17	19	18		100	

注：収葉量は'87、'88、'90、'91の4年間の平均である。

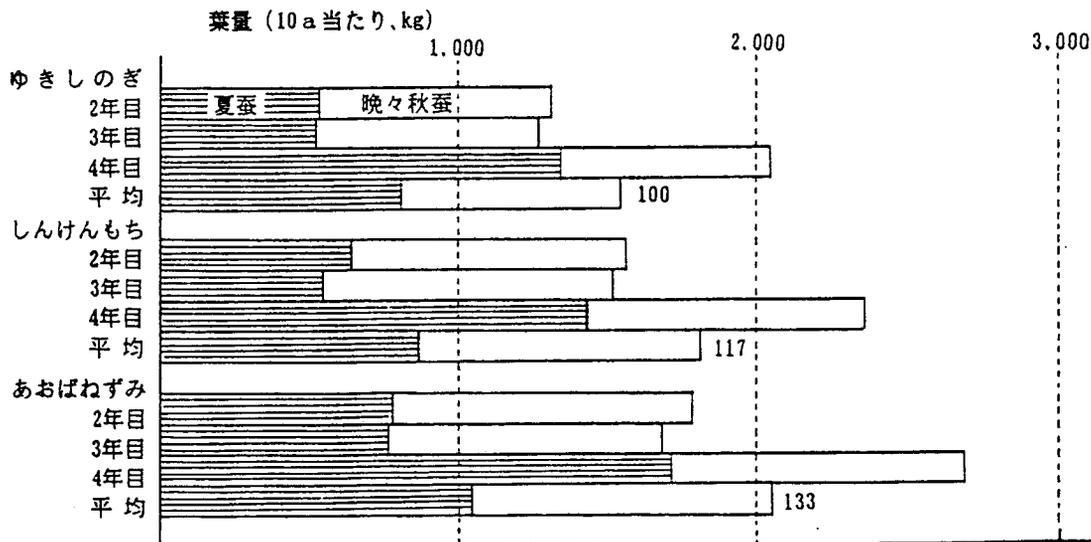


図1 密植、夏秋専用桑園における桑品種別収量 (1988~1990年)